

令和 7 年度ビッグレスキューかながわ参加報告

① 避難所内保健医療福祉活動訓練

事務局 災害対策部 下田栄次

このたび、令和 7 年 11 月 9 日(日)に三浦市立岬陽小学校体育館（地域会場）で開催されました「令和 7 年度ビッグレスキューかながわ（避難所内保健医療福祉活動訓練）」に、神奈川 DWAT（災害派遣福祉チーム）として参加しました。本会からは、4 名の神奈川 DWAT 登録員が参加しました。

本訓練は、能登半島地震等の教訓を踏まえ、避難生活における身体的負担を原因とする「災害関連死」を防ぐことを主眼とし、発災から 1 週間～1 カ月程度の「亜急性期」における保健・医療・福祉の関係機関の連携強化および役割確認を図ることを目的としています。

私は昨年度に続き 2 度目の参加となり、本会災害対策部部員が DMAT（災害派遣医療チーム）として、別会場の社会福祉施設訓練に参加するなか、神奈川 DWAT 統括として活動を取りまとめ、避難所内の支援活動を展開しました。今回の DWAT チームは、神奈川県地域福祉課災害福祉グループ、県社協、登録員、総勢 21 名の体制で臨み、避難所内では相談窓口対応の 2 隊、巡回支援隊の 2 隊で支援活動を展開しました。訓練では、DWAT が避難者役の方々に対しアセスメントを実施し、この一般避難所での生活継続が困難と判断されるケースをかながわ DPAT（災害派遣精神医療チーム）や三浦市保健師チームと連携しながら 2 例特定しました。その後直ちに、二次避難所（福祉避難所）への移送が望ましい旨を三浦市福祉課（福祉避難所担当者）へ報告する訓練を実施しました。この移送調整の過程では、美山特養ホーム、遊楽の丘など、三浦市と協定を締結する施設の施設長も参加されており、生活困難ケースの多様なニーズと、それを円滑に引き継ぐための行政（三浦市）と福祉施設側の連携手順（災害時緊急受入要請書の発行など）を確認・共有する貴重な機会となりました。

三浦市が想定する大正型関東地震（最大震度 6 強～7）では、令和 6 年能登半島地震と同様に半島型災害の様相を呈し、アクセシビリティの脆弱性に起因したライフラインの長期途絶といった複合的な被害が懸念されます。こうした環境下で「生活不活発病」や「災害関連死」をゼロにするためには、行政とそれぞれの専門性を活かした各支援チーム（DMAT、DWAT、JMAT、DPAT 等）が緊密に協同する取り組みが不可欠です。

今回の訓練で、要配慮者のアセスメントから福祉避難所への受入調整までの一連の流れを多職種で実践し、その連携の端緒について、連携の第一歩を踏めたと確信しています。一方で、実際に福祉避難所側の施設長からは、災害時における保健医療福祉の専門職との連携は必要であるという認識が改めて示されており、避難生活が長期化することによる ADL 低下の予防に、私たち理学療法士の役割も重要であることが再認識されました。ここから、この訓練でみえた具体的な課題の解決に向けた見直しを、DWAT としても、また本会としても、しっかりとサポートし、関わっていきたいと思います。特に、災害発生時に要配慮者をスムーズに避難・移送するためには、平時から、個別避難計画の策定支援を重点的な平

時対策として、行政や地域と協同し進めていく必要性が強く示唆されました。行政と専門職が互いに守り合う姿勢を示し、住民の健康と生活を守り抜く体制の強化に貢献していきたいと考えています。



かながわ DWAT 統括（筆者）から各隊リーダーへの要配慮者情報の伝達



避難所から福祉避難所への移送に関するケース会議

② DMAT による福祉施設訓練

事務局 災害対策部 中橋真弓

同じく、神奈川県による総合防災訓練「ビックスキューかながわ」に、神奈川 DWAT 登録員として参加しました。自身、当訓練への参加は 3 度目で、海老名市開催の際は神奈川県作業療法士会ブースでの協働参加、厚木市開催では神奈川 DWAT 隊員として初めて、被災後 3 週間を想定された避難所内保健医療福祉活動訓練に参加し、多くの学びと今後の課題を実感しました。

今回は、神奈川県初となる福祉施設支援を目的とした DMAT 訓練が行われた三浦市にある社会福祉法人啓生会 特別養護老人ホームはまゆう（地域会場）を見学させていただきました。

この見学は今後、活動する保健医療福祉チームの連携を目的に行われ、実際の活動手順や支援評価方法だけでなく、受援する施設側への災害医療教育など多くの場面を見学し、訓練では DMAT による施設概要聞き取りや入居者リスト及び搬送者選定、聞き取りを基にした施設評価「現状分析と課題」の作成を行い、能登半島地震でも行われた施設運営の支援に関する実働を垣間見ることができました。

見学の中で、施設職員及び DWAT 隊員、見学者には福祉介護職種が多く、医療専門用語や災害医療に関する共通認識が薄いこと、情報共有における配慮について、医療ニーズの判断など多くの点について今後共有すべき課題があることを学びました。

また、実働での連携を考えると、福祉として行える支援の具体的な提示が必要であること、多くの支援チームが参加するなかで、施設や利用者を配慮した役割分担が行えるよう、平時からお互いの役割や活動内容を周知、検討できることが必要であると痛感しました。

理学療法士として、災害医療、保健医療活動だけでなく、生活支援としての福祉・介護ニーズにも広く対応できる職種であることを誇りに思い、各方面でどのように職能を活かした活動が行えるか課題を整理しながら、今後の活動計画に役立て、平時での連携や活動準備に役立てていきたいと考えています。

